

「酔歌」、「救済について」、「幻影と謎」の新たな解釈

——永遠回帰の肯定とは何か

新 名 隆 志*

A New Interpretation of ‘The Night Wanderer’s Song’, ‘On Redemption’, and ‘The Vision and the Riddle’ ——What Is the Acceptance of Eternal Recurrence?

NIINA Takashi

要約

本稿はまず、ニーチェの主著『ツァラトゥストラ』第四部「酔歌」の解釈に依拠した永遠回帰肯定の通説的な解釈を批判する。本稿が「因果的解釈」と名付けるこの解釈は、一つの事物の肯定とすべての事物の因果的連鎖から永遠回帰肯定が導かれると主張するが、そのような回帰肯定の理解には大きな難点があり、またこの解釈が依拠しているテキストの読みも誤っている。これに対し本稿は、永遠回帰肯定を暗示する三つの重要個所、「酔歌」、「救済について」、「幻影と謎」について通説とは異なる解釈を提示し、この三個所でそれぞれ永遠回帰を肯定する主体として示される「快」、「力への意志」、「勇氣」の一体性において、永遠回帰肯定を理解するための真の鍵となる、力の快を得るための苦への意志という論理を、『ツァラトゥストラ』内部のテキストから浮かび上がらせる。

キーワード：永遠回帰、ツァラトゥストラ、「酔歌」、「救済について」、「幻影と謎」

はじめに

本稿の目的は、第一に、ニーチェの主著『ツァラトゥストラ』第四部「酔歌」に依拠した永遠回帰肯定の通説に対する批判にある。本稿の中で「因果的解釈」と名付けるこの見解は、間違い

* 鹿児島大学教育学部 准教授

なく通説と言えるものの、実際には多くの難点を抱えている。また、この通説の基本的根拠である「酔歌」十の読解は、従来のニーチェ研究全般が暗黙のうちに受け入れてきたものだが、本稿は「酔歌」十の正確な読みを通じてそれが誤りであることを示すだろう。

第二のよりポジティブな目的は、第四部「酔歌」、第二部「救済について」、第三部「幻影と謎」という『ツァラトゥストラ』において永遠回帰肯定を暗示する主要三章について新しい解釈を示し、この三章の連関を示す中で永遠回帰肯定の本質を浮かび上がらせることである。本稿が示す解釈は、永遠回帰と力への意志の本質に関して筆者が別の機会に示した論文と関連している。その論文では永遠回帰の本質が「力の快」の論理から捉えられることについて大まかな見取り図が示された。本稿の内容は、主著『ツァラトゥストラ』の重要個所の詳細な読解を通じて、その見取り図に確固たる基盤を与えるものである。

一 「因果的解釈」の問題点

ニーチェの中心思想と考えられている永遠回帰の解釈は、何よりもまず主著『ツァラトゥストラ』に依拠しなければならない。言うまでもなく、永遠回帰がこの著作の「根本構想」だからである（EH, 335）。永遠回帰の意義と本質をこの主著に読み取ろうとしてきた従来の解釈は、主に三つの章に注目し、重点的に解釈してきた。それが、第二部「救済について」、第三部「幻影と謎」、第四部「酔歌」である。この三章が重視されてきたのは、この主著の主人公ツァラトゥストラの歩みの基本的なテロスと考えられる永遠回帰の肯定が、そこに暗示されているからである。

この中でも第一に重要と考えられるのは「酔歌」であろう。なぜなら「酔歌」は四部構成としての『ツァラトゥストラ』のクライマックスにあたる部分であり、また他の二か所以上に明瞭な表現によって永遠回帰の肯定が表現されているからである。従来の解釈は、「酔歌」からどのように永遠回帰の肯定を読み取ったのであろうか。要となるテキストは「酔歌」十の次の部分である。

「君たちは、かつてある一つの快に対して然りといったことがあるか。おお、わが友人たちよ、それならば君たちはすべての苦しみにもまた然りと言ったのだ。すべての事物が鎖でつながれて、糸で結ばれて、惚れ込まれているのだ、——

——君たちがかつて一度のことを二度欲したならば、君たちがかつて、〈私はお前が気に入った、幸福よ、刹那よ、瞬間よ〉と語ったならば、君たちはすべてが帰ってくることを欲したのだ。

——すべてが新たに、すべてが永遠に、すべてが鎖でつながれて、糸で結ばれて、惚れ込まれて、おお、君たちはそのように世界を愛したのだ、——」（Za, 402）

従来の解釈がここに見出してきた論理を分かりやすく示すならば次のようになるだろう。「一つの快に対して然りといった」とすれば、それは「すべての苦しみにもまた然りと言った」ことになる。「一度のことを二度欲した」とすれば、それは「すべてが帰ってくることを欲した」ことになる。その理由は「鎖でつながれて、糸で結ばれて、惚れ込まれて」という叙述に示されて

いる。これはすべての事物の因果的連鎖を意味している。ある一つの事物はそこに至るすべての諸事物の連鎖によって生じたのであり、何もものそれだけで独立して存在はしない。したがって、ある事物を肯定することは、すべての事物を肯定することと同じである。このような論理である。この解釈を「因果的解釈」と呼ぶことにしよう¹。

因果的解釈をはっきりと提示した解釈者は実際には多くないかもしれない。しかし、ニーチェ研究の現状はこの因果的解釈を暗黙に定説として受け入れていると思える。実際に「酔歌」十のこの部分の読みについての論争は存在しないに等しい。確かにこの解釈は分かりやすい。またこの解釈を裏付けるような遺稿断片がいくつか存在する。因果的解釈が、「酔歌」十と重ね合わせ、自説の根拠とする遺稿断片を列挙してみよう。順に一八八四年春、一八八六年末—一八八七年春、一八八八年春の断片である。

「注意。原則。いかなる体験も、その起源へさかのぼれば、世界の過去全体を前提する。一つの事実を是認することは、すべてを是認することを意味するのだ。」(KSA 11, 107, 25[358])

「第一の問題は、我々が我々に満足しているかでは全くなく、我々がそもそも何かに満足しているかである。我々がある唯一の瞬間に然りと言うならば、それによって我々は我々自身だけでなく、すべての事物に然りと言ったのである。というのも、それはそれだけで存在するのでも、我々の内に、また諸事物の内に存在するのでもないからである。たった一度でも我々の魂が、幸福のために弦のように震えて鳴り響いたならば、この一つの出来事を引き起こすためにすべての永遠が必要であったのだ——そしてすべての永遠は我々の然りのこの唯一の瞬間において是認され、救済され、正当化され、肯定されているのだ。」(KSA 12, 307, 7[38])

「〈非難すべき行為〉という概念は我々を手こずらせる。それ自体として非難すべきものなどありえない。およそ生じるすべてのものは、それ自体として非難すべきではありえない。というのも、それを除去しようとするなど許されないからである。というのも、どんなものもすべてのものと結びついているので、何かあるものを排除しようとするとは、すべてを排除することになるからである。一つの非難すべき行為とは、全体として非難された世界という意味である。」(KSA 13, 234, 14[31])

確かにこれらの断片には因果的解釈の論理が見出せる。上の三つの断片のいずれも、すべての事物が因果的に結びついているということを前提として、一つの事物のみを是認したり非難したりはできないこと、一つを肯定するならばすべての事物を肯定することになることを述べている。それは認めざるをえない。そしてこれらの遺稿断片と「酔歌」十が非常に似て見えることも確かである。それゆえ、これらの遺稿断片は因果的解釈に説得力を与えるように思える。しかし、因果的解釈を永遠回帰肯定の意味と考えることは非常に大きな難点を伴う。すぐに思い浮かぶ三つの問題点を提示しよう。

(1) 因果的解釈によれば、何か一つのことさえ肯定すれば永遠回帰の肯定が論理的に導かれてしまうことになる。だとすると、永遠回帰を肯定しないという生のあり方が分からない。我々は普通色々なことを肯定するし、頻繁に快を感じるからである。つまりこの解釈によれば、誰もが永遠回帰を肯定している、ということにならないか。

(2) ツァラトゥストラは、実際何度も幸福を感じている。因果的解釈をとるならば、ツァラトゥストラは幸福を感じた瞬間に永遠回帰を肯定するはずである。しかしツァラトゥストラにとって永遠回帰は常に耐え難いものであり、その肯定は目標であり続けている。

(3) 『ツァラトゥストラ』、また遺稿断片からして、永遠回帰の肯定が道德の克服、あるいは同情の克服、価値転換という問題と密接に結びついていることは疑いようがない。しかし因果的解釈では、永遠回帰の肯定とこうした問題との連関は捉えられない。というより、捉える必要すらなくなってしまふ。

これらの難点はあまりに大きな難点に思える。これほどの問題点を抱えた解釈が正しい解釈とは思えない。しかしそれにもかかわらず因果的解釈についての論争これまで存在しなかったのは、「酔歌」十の他の読み方が不可能と考えられてきたからであろう。ここでさしあたり「酔歌」十の読みの問題を置いておくとすれば、他にどのような永遠回帰肯定のモデルが提示できるだろうか。次の二つのモデルについて考えてみよう。

(ア) 辛かったこと苦しかったこと色々あるとしても、全体としてこの人生を肯定できる、ということが永遠回帰の肯定である。

(イ) たった一つの出来事でもなく、全体としての人生でもなく、過去、未来の出来事一つ一つをすべてそれ自体肯定できなければ永遠回帰の肯定にはならない。

(ア) を「全体論的解釈」²、(イ) を「一切肯定的解釈」³と呼ぶことにしよう。これらは永遠回帰肯定の解釈としてどれほど有力だろうか。まず全体論的解釈は容易に批判できるように思われる。第一に、この解釈は、いわば生を最後に振り返って、「色々あったけど、全部ひっくり返して幸せだったと言える」というような心境として永遠回帰肯定を捉えるわけだが、こうした人生の肯定を全ての人ができるわけではないとしても、だからといって極めて困難とも思えない、ということである。このような心境になれば永遠回帰に耐えたと言えるのなら、永遠回帰が多くの人を没落に導くような恐ろしい思想だとニーチェが考えた理由が全く分からない。つまり、この解釈は永遠回帰肯定がなぜそれほど困難かを説明しない。第二に、因果的解釈の難点(3)がこの解釈にも当てはまる。第三に、このような全体論的な肯定を永遠回帰の肯定として示すテキストがそもそも見当たらない。唯一、この解釈が示す人生肯定に近いものと考えられるのは、

ツァラトゥストラが最終的に否定的に見る存在である高等な人間の一人、「最も醜い人間」の心境である。「酔歌」は、高等な人間たちが幸福を感じている中で「最も醜い人間」が人生の再来を望むという場面から始まるのだが、「最も醜い人間」はこう述べるのだ。

「〈わが友人のみなさん〉、最も醜い人間は語った。〈君たちはどう思うか。この日のために——私は初めて、私が全人生を生きただけに満足している。／そして、そのように証言することではまだ十分でない。この世は生きる甲斐がある。ツァラトゥストラと共にいる一つの日、一つの祝祭が、私にこの世を愛することを教えてくれたのだ。／“これが——生であったのか” 私は死に対して語ろう。“よし、もう一度。”」(Za, 395-396)

「最も醜い人間」はこのように自分の人生を肯定するのである。全体論的解釈が正しいとすれば、彼は永遠回帰を肯定できたことになるだろう。しかしそれは明らかにおかしい。「酔歌」の次の最終章「しるし」で、ツァラトゥストラは結局高等な人間たちを「私の仲間ではない」と断じ、彼らはツァラトゥストラの洞窟から逃げていく (Za, 405-407)。その場面の草稿はもっとはっきりしており、ツァラトゥストラは高等な人間たちの幸福に同情し、彼らを自分の「ハンマー」で粉砕したほうがよいと考える (Vgl. KSA 11, 409-415, 32[13]-32[15])。「ハンマー」とは周知のように永遠回帰の比喩である。すなわち、「最も醜い人間」が語るような人生への満足は、永遠回帰で粉砕されるような幸福に過ぎないのである。

以上のことからして、全体論的解釈も因果的解釈と同様、永遠回帰肯定の解釈としてふさわしいと思えない。では一切肯定的解釈はどうだろう。この解釈では、一切の出来事・事物をそれ自体肯定できるときに初めて、一切の事物が永遠回帰することに耐えられることになる。この解釈は他の二つの解釈の問題点を回避する。この解釈では永遠回帰肯定は非常に困難なことになる。このことは、永遠回帰肯定のために道徳の克服や価値転換が必要とされるとニーチェが考えていることとも符合するだろう。決定的な価値の転換がなければ、一切の事物をそれぞれ肯定することなど不可能だろう。そのような肯定は人間の業を超えたまさに「超人」的なものに思える。だが永遠回帰肯定の理解とは、まさにこうした超人的肯定を可能にする価値の転換とは何か、一切の事物を肯定しようような境地とは何かを明らかにすることに他ならないだろう。右に批判した二つの解釈は、そもそもその本質的なところに答えることができないのである。したがって、ここではさしあたり一切肯定的解釈を有力な解釈モデルとしておこう。以下の考察によって、この解釈モデルの正しさがより明らかになるだろう。

さてしかし、因果的解釈には大きな難点があるので他の解釈モデルがふさわしいと言っても、回帰肯定の最重要テキストである「酔歌」が因果的解釈によってしか読み取れないならば、因果的解釈を退けることはできない。そこで次に、改めて「酔歌」を正確に読むことによって、因果的解釈の妥当性を検証してみよう。

二 「酔歌」

因果的解釈は、「酔歌」十の「すべてのものが鎖でつながれて、糸でつながれて、惚れ込まれている」を事物の因果的連鎖の表現とし、「一つの快に対して然りと行った」から「すべての苦痛に対して然りを言う」を導く根拠としたのであった。しかし、「酔歌」十を丁寧に読むならば、それが妥当ではないことが分かる。改めて引用しよう。

「君たちは、かつてある一つの快に対して然りと行ったことがあるか。おお、わが友人たちよ、それならば君たちはすべての苦しみにもまた然りと行ったのだ。すべての事物が鎖でつながれて、糸で結ばれて、惚れ込まれているのだ、——

——君たちがかつて一度のことを二度欲したならば、君たちがかつて、(私はお前が気に入った、幸福よ、刹那よ、瞬間よ)と語ったならば、君たちはすべてが帰ってくることを欲したのだ。

——すべてが新たに、すべてが永遠に、すべてが鎖でつながれて、糸で結ばれて、惚れ込まれて、おお、君たちはそのように世界を愛したのだ、——」(Za, 402)

特に後半の二段落に注目しよう。これは最初の段落と同じことをより詳細に述べる部分と理解できる。最初の段落同様ここでも「すべてが鎖でつながれ、糸でつながれ、惚れ込まれて」という表現が表れるが、世界がこのようであるから、「すべてが帰ってくることを欲した」ことになる、とは書かれていない。つまり、最後の段落はその前の段落の原因、根拠ではない。そうではなく、君たちが「すべてが帰ってくることを欲した」ということは、すべてが結び付けられ惚れ込まれる、「そのように君たちは世界を愛した (so liebtet ihr die Welt)」ということだ、と言われている。つまり「すべてが鎖でつながれ、糸でつながれ、惚れ込まれて」は「すべてが帰ってくることを欲した」の言い換えと考えられるのである。

この解釈は、「惚れ込まれて (verliebt)」と「愛した (liebtet)」という言葉に着目することでより説得力を増すだろう。世界が「惚れ込まれている」から世界を「愛した」という論理はそもそも奇妙である。一方、世界が「惚れ込まれている」というように (so) 世界を「愛した」という解釈は非常に自然である。

整理しよう。(a) 一つのことを欲する、(b) すべての回帰を欲する、(c) すべてがつながれている、という三つについて、因果的解釈は (a) という条件から (b) という帰結を生じさせる論理が (c) であるとする。(a) と (c) という条件のもとで (b) が帰結すると言い換えてもよい。しかし、「酔歌」十にこの論理を読み取ることはできない。そうではなく、「酔歌」十で言われているのは、(a) という条件から (b) = (c) が帰結するというにすぎない。

しかし、以上の解釈では (a) と (b) = (c) をつなぐ論理は何かという問題が残る。この問題は『ツアラトゥストラ』と遺稿断片から詳細に総合的に解釈されるべきものであり、本稿でそのすべてを示すことは不可能である。本稿では『ツアラトゥストラ』における永遠回帰肯定に関わる重要なテキストの解釈を通して従来の通説を批判し、新しい永遠回帰解釈のためのいわば“地ならし”と“土台作り”をすることとどまるだろう。しかしともかく、まず「酔歌」十一において (a) と (b) = (c) をつなぐ論理が暗示されていることを確認しておきたい。

「すべての快はすべての事物の永遠を欲する」、「快が欲しない何があるか」(Za, 403)。このように、十一では、「快 (Lust)」こそが一切の諸事物の永遠回帰を欲する主体だということが明示される。しかしなにゆえ快はすべての事物を欲しうるのか。その論理が暗示されるのは次の部分である。「君たち高等な人間よ、それは君たちを切望する、快、この御し難い、至福のものは、——君たちの苦しみを切望するのだ、君たち出来損ないよ。すべての永遠の快は、出来損ないを切望するのである。／というのも、すべての快は自己自身を欲するからである。それゆえ快は心の苦悩もまた欲するのだ」(Za, 403)。

ここには、(1) 快が自己自身を欲する、ということが原因、根拠となって、(2) 快は苦をもまた欲する、という論理が見出せる。十では、一つの快を欲することはすべての苦を欲することだと述べられた。十一ではそのことが快の論理として捉え直されていると言える。いわば、十で謎めいた形で提示された「快の肯定」と「すべての苦の肯定」の連関の秘密を、十一は快の論理として露わにするという構造になっている。しかしもちろん、(1) と (2) をつなぐ論理はやはり不明瞭なままである。なぜ、快が自分を欲するということが、苦をも欲するということを導くのか。因果的解釈は、やはりこの論理の暗黙の前提として事物の因果的連鎖を想定することになるだろう。しかし明らかなことは、この十一にも因果的な論理の表現など全く見出せないということである。

この十一に最低限確実に読み取れるのは、快と苦という対立したものの密接な連関であり、「快のために苦が必要とされる」というそれ自体ではまだ内実が不明瞭な論理である。ここまでの解釈から明らかなように、「酔歌」においてこの論理を因果性から解釈できる根拠などない。さらに、仮に因果性から解釈して永遠回帰肯定の理解が進むならまだしも、先に述べたように因果的解釈は様々な難点を含んでいる。とすれば因果的解釈をとる必要はないだろう。十一では次のように言われる。「快は、苦しみを、地獄を、憎しみを、恥辱を、障害者を、世界を渴望するほど豊かである」(ibid.)。快がこの世の苦を欲するのは快が「豊か (reich)」だからである。このような表現は因果性とまったく適合しないように思える。我々は苦を欲する快の「豊かさ」を因果性とは別のものに求めるべきだろう。

最後に、以上の解釈でも残る次の問題を簡単に検討しておこう。「酔歌」十、十一からは、すべての快が永遠回帰を欲するということが読み取れる。これをどのように理解すればよいだろうか。これは、快を感じた時にすでに永遠回帰を肯定していたのだ、ということの意味するだろうか。このように解するならば、結局は因果的解釈がもつ難点そのまま残ることになってしまう。

「酔歌」の叙述から次のことは認めざるを得ない、どのような快もその本質からしてすべての苦を欲し、すべての事物の永遠回帰を欲するものと考えられている。しかしまた、だからといって人生の内では何か一つの快を覚えた個人がそのときに実際に永遠回帰を肯定できているとは考えられない。とすれば次のように考えるべきであろう。快をその本来的なあり方で享受する者のみが永遠回帰を肯定しうる。その快を繰り返し味わうためにこの世のすべての苦、この世のすべて

の否定的なものを欲する者のみが、真の意味で快の内にある。言い換えるならば、快の内でありながらすべての苦を欲するような状態になっていなければ、その個人はいまだ快をその本来のあり方で享受していないということである。「酔歌」のみからはさしあたりこれ以上の解釈は不可能であろう。この本来的な快が何かということは、この論文の最後に基本的な解釈を示すことができるだろう。

さて、以上によって、「酔歌」からは因果的解釈の根拠となる記述が見出せないこと、そして永遠回帰肯定においては快が苦を必要とするという論理が要であることは確かであり、これを因果性からではない別の仕方の説明すべきと考えられることが明らかになった。実は、『ツァラトゥストラ』の中で永遠回帰を暗示する章として常に重視されてきた第二部「救済について」の叙述が、以上の理解を裏付けてくれると思われるのである。

三 「救済について」

「酔歌」から読み取った、(a)一つのことを欲する、(b)すべての回帰を欲する、(c)すべてがつながっている、の三つの関係性を確認しよう。因果的解釈が、(c)を、(a)から(b)を導く論理と見なしたのに対し、本稿は、(b)と(c)は、(a)から帰結する基本的に同記事態と解すべきであることを示した。つまり、快が回帰を欲するというよりも前に前提され、それによって始めて回帰が欲せられる条件としてすべてがつながっているという因果的連鎖があるのではなく、快が回帰を欲することと相即的に、すべてがつながっているように世界が表象されると理解したのである。これを踏まえて「救済」を見てみよう。

「救済」では、意志がすべての「そうあった」に対して「そのように私は欲した（欲する、欲するだろう）」と語ることをして回帰が暗示される。このように過去を欲することは「過ぎ去ったものの救済」と言われる（Za, 179）。すべての過去を欲することはすべての事物を欲することにはかならない。過去を救済する意志は「酔歌」の快に対応するのである。ここで注目すべきなのは次のようなツァラトゥストラの言葉である。

「すべての〈そうあった〉は、一つの断片、謎、恐ろしい偶然である——創造する意志がそれへこう言うまでは。〈しかし私がそのように欲したのだ。〉」（Za, 181）

「そうあった」、すなわち過去は、過去を救済する意志が現れる「までは (bis)」、「一つの断片、謎、恐ろしい偶然」と言われる。「断片 (Bruchstück)」、「謎 (Räthsel)」、「偶然 (Zufall)」という言葉は、全体性を欠いたもの、意味、意義が不明なもの、必然性を欠いたものというような意味を喚起する。このような過去が、意志の救済によってどのように変化するのか。それは次の言葉から読み取れる。

「断片であり謎であり恐ろしい偶然であるものを、一つに作り集めそろえること (in Eins dichten und zusammentragen)、これが私の志向と狙いのすべてである。」(ibid.)

「一つの断片、謎、恐ろしい偶然」である過去を、「一つ」に「集めそろえる」ことがツァラ

トウストラの目的と言われる。すなわちここに過去の救済の意味がある。「そうあった」のそれぞれは、意志がそれを欲し得ないときにはばらばらで意味と必然性を欠いた存在である。しかしそれらがすべて欲せられたとき、そのばらばらの断片が全体のまとまりへ形成されて「一つ」になり意味と必然性を与えられるのである。

この救済としての永遠回帰肯定の描写には、我々が「酔歌」十から読み取った (b) すべての回帰を欲する、と (c) すべてがつながれている、の関係性とまったく同じものが読み取れる。「救済」においても、(c) は (b) の前提条件として回帰肯定の前に想定されている因果性などではない。それどころか、回帰肯定の前はすべてがばらばらの断片なのだ。回帰肯定の意志の存在によって初めて、この肯定と相即的にすべてのものが「一つに」つながるのである。このことは「酔歌」十の我々の読みの正しさを裏付けてくれるだろう。「すべてが新たに、すべてが永遠に、すべてが鎖でつながれ、糸でつながれ、惚れこまれて、おお、そのように君たちは世界を愛したのだ——」

(Za, 402) という「酔歌」十の叙述は、回帰肯定以前には「断片」であり「謎」であり「恐ろしい偶然」であった一切の事物が、快による回帰肯定において初めて、それと相即的に「すべてが鎖でつながれ、糸でつながれ、惚れこまれて」いるように表象されることと解されるべきなのである。

「酔歌」と「救済」の対応関係はさらに詳細に捉えることができるだろう。「救済」において、「断片、謎、恐ろしい偶然」としての過去、「そうあった」は次のようと言われる。「〈そうあった〉意志の歯ぎしりと最も孤独な憂愁はそのように呼ばれる。為されたことに対する無力——意志はすべての過去への怒れる傍観者である」(Za, 179-180)。このように、過去を意志できない意志において、変えられない過去は苦しみの対象である。それゆえ「意志するものは遡って意志することができないので、意志するものの中には苦惱 (Leid) がある」(Za, 180) と言われる。過去を肯定できないこの意志は、意志すること自体を「罰」とし、肯定できない生を否定する。かくしてこの意志は、「〈すべては過ぎ去る。それゆえにすべては過ぎ去るに値するのだ。〉」と語る (Za, 180)。このような事態は「酔歌」で快と対比されて次のように述べられる苦のありかたに対応するだろう。「苦しみは語る。〈過ぎ去れ、消えろ、お前苦しみよ。〉」(Za, 401)。

回帰肯定の快はこうした事態を変える。この快は自己のために苦を必要とする。それゆえこの快において初めて、苦の対象であり否定的なものであった「そうあった」が遡って欲せられる。過去の諸事物は、すでに因果の必然のうちでつながれ一つであるから欲せざるをえないのではない。ばらばらの「断片、謎、恐ろしい偶然」である過去が、この苦を欲するという特別な意志、救済者の意志によって初めてつながれ一つになるのである。意志が遡って意志し、苦の対象であるばらばらの過去をひとつにするためには、快がそれ自身にとって苦を必要とするという論理が必要なのである。この快の論理において初めて「断片、謎、恐ろしい偶然」が「一つ」になるということの意味が理解されるだろう。回帰肯定の快は、すべての事物を欲することにより、断片としてのすべての事物を自らにもとに合一する。そこにおいてこれら変えようのない過去として

の否定的な諸事物は、快が自らを欲するために必要なものとして意味をもち、快が存在するための要素、条件として必然性をもつのである。

このように、快が自分のために苦を必要とするという第四部「酔歌」で初めて明かされる快の秘密が、第二部「救済」における永遠回帰肯定の暗示としての救済の意味をより詳しく規定する。もちろん、快が自分のために苦を必要とするこの快の論理の意味はいまだ本稿では全く明らかにされていない。しかし最後に注目したいのは、「酔歌」の永遠回帰肯定の快に対応する概念が、「救済」の中にも表れているということである。それは次のように述べられる。

「誰が意志に時間との和解を、そしてすべての和解よりも高いものを教えたのか。／力への意志である意志は、すべての和解よりも高いものを欲しなければならない——。しかし、このことは意志にとってどのように起こるのか。誰が意志に、遡って欲することさえも教えたのか」(Za, 181)。

ツァラトゥストラはここで話を止める。この最後の部分に重要な暗示がある。「すべての和解よりも高いもの」とは「遡って欲すること」に言い換えられている。すなわちそれは永遠回帰を欲することである。「和解 (Versöhnung)」は対立の終結を意味する。しかしすべての事物の永遠回帰を欲することは、それまで意志が怒り、恨み、対立関係にあった過去と単に仲直りするだけではない。それは過去を自分のために必要なものとして積極的に望むことである。重要なのは、「酔歌」では「快」とされた回帰を欲する主体が、ここでは「力への意志」とされることである。これは、「酔歌」の快と力への意志が同じものであることを明確に示している。まさにここに、永遠回帰肯定の解釈のための最大の課題とヒントがある。

快と力への意志の一致は、「酔歌」と「救済」が共に永遠回帰肯定を暗示する箇所であることを認めるならば、解釈の余地なく認めなければならない基本テーゼである。したがってこの一致の意味を解釈することは永遠回帰解釈における基本課題と言える。そして、因果的解釈を退け、〈快が自分のために苦を必要とする〉という論理を因果性とは別のものに求めるべきであることを確認した我々にとって、快と力への意志の一致がこの論理を解釈するための最も重要と言ってよいヒントである。〈快が自分のために苦を必要とする〉はこう言い換えることができるのだ。〈力への意志は自分のために苦を必要とする〉。今やこのテーゼの解釈こそが永遠回帰肯定を理解するための鍵であることが明らかになった。残された第三部「幻影と謎」の解釈を通して、永遠回帰肯定の意味をさらに明らかにしていこう。

四 「幻影と謎」1——永遠回帰の宇宙論的説明

この章でツァラトゥストラは、瞬間の門道において次のように永遠回帰を暗示する。

「私はさらに語った、〈見よ、この瞬間を。この瞬間の門道から長い永遠の道が後方に走っている。われわれの背後に一つの永遠がある。／すべての事物のうち走り得るものは、すでに以前この道を走っていることが必然ではないのか。すべての事物のうち生じうるものは、すでに以前

生じ、なされ、過ぎ去っていることが必然ではないのか。／そしてもしすべてが存在したならば、お前侏儒はこの瞬間をどう考えるか。この門道もまた——存在したことが必然ではないのか。／そして、この瞬間がすべての来たるべき事物を自分の後に引き起こすように、すべての事物は固く結ばれているのではないか。したがって——自分自身すらも引き起こすように。／というのも、すべての事物のうち走り得るもの、それはこの長い前方への道を——いつかまた走らなければならないからだ。）」(Za, 200)

このような論理により、ツァラトゥストラは、「我々は永遠に回帰しなければならないのではないか」(ibid.)と結論する。ここで語られているのは、永遠回帰肯定の境地ではなく、永遠回帰の宇宙論的説明である。「瞬間」という名の門道から前方と後方に永遠に続く道は、永遠の時間の比喩である。時間が永遠であり、そこで生じうる事物が有限であり、すべての事物が因果で「固く結ばれている」という条件であれば、その無限の事物の中で有限の事物の因果系列が無限に繰り返されることになる。この条件下では我々は永遠に回帰「しなければならない müssen」のである⁴。

つまりここで示されるのは、いくつかの諸条件を前提とした場合の論理的必然性として永遠回帰の世界が導かれるということである。ここでは確かに因果性はその条件の一つである。因果的解釈が依拠している諸断片が述べるように、もしこの永遠回帰の世界を前提した上で、この世界で何か一つを肯定すれば（繰り返し欲すれば）、すべてのことを肯定しなければならない（繰り返し欲しなければならない）という論理的要請が生じるだろう。ただし、これ自体は永遠回帰の世界を肯定することではなく、その世界像そのものから論理的に導かれることにすぎない。

あの諸断片はこのように、永遠回帰の世界観から論理的に要請される「肯定」というもののあり方を明らかにするものと考えられるだろう。すなわちそれらは、もしこの世界が永遠回帰の世界であるならば、何か一つのことを肯定するというあり方は許されず、すべての事物が肯定されるかそうでないかで「なければならない」ということを表すのである。

ここから次のように考えることができる。あの諸断片は、いわば課題としての永遠回帰の世界像の提示である。この世界像の提示は、すべての事物が肯定されるかそうでないかの二者択一の実存のあり方を迫る。永遠回帰思想の要点は、この実存の一方、すなわちすべての事物を肯定するという境地に達することにある。つまりあの諸断片は、永遠回帰肯定についての因果的解釈の根拠であるどころか、むしろ一切肯定的解釈の根拠になり得るのである。それらは、すべての事物がそれぞれすべて肯定されることなしに、永遠回帰の世界の肯定はありえないことを示しているのである。

永遠回帰の最初の告知、『喜ばしき知』三四一節のデーモンの言葉は、まさにこの課題としての永遠回帰提示の意義をもつと考えられる。デーモンは次のように永遠回帰の世界像を語る。「君の生を、君が今生きそして生きてきたように、君はもう一度、いや無限回生きなければならないだろう。そしてそこには何も新しいものがなく、あらゆる苦痛とあらゆる快、あらゆる思想とた

め息、そして君の生の言い表せないほどの大小のことどもすべてが、君に回帰しなければならぬ。しかもすべてが同じ順序と系列で」(FW, 570)。

これ自体は価値中立的な永遠回帰の宇宙論的説明にすぎない。しかし、もし世界がこのような永遠回帰の世界であるならば、我々の実存はすべての事物を肯定するかそれとも一つの事物も肯定できないかの極端な二者択一を迫られることになる。デーモンのこの言葉に対する二種類の反応、つまり歯ぎしりしてデーモンを呪うか、それともデーモンを神と見るか (ibid.) がこの極端な二者択一を示すだろう。この二者択一性はまた、永遠回帰の世界像に支配されたならば「すべてのことあらゆることにおいて、〈君はこれをもう一度、そして無数回欲するか〉という問いが最大の重しとして君の行為に置かれる」(ibid.) と言われることからはっきりと読み取れる。つまり永遠回帰の世界像を受け容れるならば、「もう一度」は「たったひとつのこと」などではなく、「すべてのことあらゆることにおいて (bei Allem und Jedem)」(ibid.) 求められるのである。つまりこの永遠回帰最初の告知のテキストこそ、一切肯定的解釈の強力な根拠なのだ。

以上によって、「幻影と謎」における永遠回帰の宇宙論的説明においてこそ因果性が条件となることを手掛かりとして、永遠回帰肯定の因果的解釈を改めて退けることができるとともに、それが依拠する遺稿断片の意義をも説明し、また一切肯定的解釈の説得性も示すことができたのではないだろうか。次に、この「幻影と謎」で暗示される永遠回帰肯定の主体に目を向けるが、その前にまず、これまで曖昧に理解されてきたと思われる「幻影と謎」における重さの霊の思想を改めて解釈したい。

五 「幻影と謎」2——重さの霊の思想、勇氣

「瞬間」と書かれた門道から両方向に永遠に道が延びている場面、これに対するツァラトゥストラの問いはこうである。

「〈この道の一つをさらに先へ——益々先へ遠くまで行くならば、侏儒よ、お前はこの道が永遠に矛盾すると思うか。〉」(Za, 200)

これに対して重さの霊はこう答える。

「〈すべての真っ直ぐなものは偽る〉と軽蔑的に侏儒はつぶやいた。〈すべての真理は曲がっている。時間自体が一つの円環である。〉」(ibid.)

重さの霊は「軽蔑的に」答えている。そして、ツァラトゥストラが道を永遠に真っ直ぐであるかのように描写したことを偽りだと言う。つまり、重さの霊はツァラトゥストラの問いに対し否定的に答えているのである。では重さの霊は何を否定するのか。ツァラトゥストラの教説は永遠の時間の中ですべての事物が繰り返すということであるのに対し、重さの霊は時間自体が円環として閉じていると答えている。つまり重さの霊は、ツァラトゥストラの時間の表象を否定し軽蔑しているのである。ここにツァラトゥストラの教説との決定的差異がある。ではこの差異はどのように解釈できるだろうか。

われわれは通常、「円環的時間」という表象によって「事物の繰り返し」を想像する⁵。

しかし、このように「円環的時間」に「事物の繰り返し」を見るのは本当に正しいだろうか。「事物の繰り返し」という概念は、それ自体、繰り返される間の時間経過の概念を含んでいる。一回目と二回目の間には時間経過がなければならない。当たり前のことだが、同時刻に起きた事柄をわれわれは一回目と二回目と区別などしない。このことからわかるように、円環的時間は、事物の繰り返しを意味しない。円環的時間において起きる事柄はすべて、ある特定の時刻に、ただ一回起きるのである。円環的時間という表象は、むしろ時間が閉じていること、有限であることを示している。そこでは確かに初めと終わりが結びついている。しかし時間の初めと終わりが存在するのであり、事物はその有限の時間の中でそれぞれ一度だけ生起するのである。

つまり重さの霊の考えは、ツァラトゥストラの永遠回帰の教説とは全く異なるものと理解できる。重さの霊は有限な時間を想定し、事物の繰り返しを否定しているのである。このように理解すれば、重さの霊の答えをツァラトゥストラが強く拒否すること、そしてそれに対して自分の主張を語るときに万物の繰り返しという点を強制的に語るの意味が素直に納得できるだろう。

ところで、「幻影と謎」では、道徳の創始者にしてその克服者としてのツァラトゥストラというモチーフ⁶が間違いなく大きな意味をもっている。重さの霊の「お前自身の刑、自分自身の投石死刑を宣告されて。おお、ツァラトゥストラよ、お前は確かに石を遠くへ投げた、——しかしそれはお前へと戻り落ちるだろう」(Za, 198)という言葉は、ツァラトゥストラが創造した道徳によって道徳そのものが破壊されるということを意味するだろう。

このことは、ツァラトゥストラと重さの霊の空間的關係によっても象徴されている。重さの霊とは、道徳という重しによって人を下方に引きずる存在であり (Za, 242-243)、「万人の善、万人の悪」(Za, 243) を語る存在、端的に言えば道徳の象徴である。「幻影と謎」において重さの霊はツァラトゥストラの「不倶戴天の敵 (Erzfeind)」(Za, 198) であるにもかかわらず、ツァラトゥストラに乗っかっており (ibid.)、ツァラトゥストラ自身がこの霊を「高みに運んだ」(Za, 200) と言われる。そして、ツァラトゥストラが永遠回帰思想をほのめかそうとする「瞬間」の門のところ、重さの霊は初めてツァラトゥストラから飛び降り、「石の上にしゃがむ」(Za, 199) のである。

ツァラトゥストラが重さの霊と共に高みに上ること、そして永遠回帰の場面で初めて重さの霊から自由になり、それと対決するということは、道徳がその極みにおいて自己克服されることを象徴しているだろう。道徳からの自由は、道徳の高みにおいて初めて可能になる。また重さの霊がツァラトゥストラによって高みに運ばれるということは、ツァラトゥストラが石を投げ上げたこととして解釈することが可能だろう。重さの霊は石の比喻によって、自分自身がツァラトゥストラを殺すことをほのめかしているのだ。自分自身がツァラトゥストラと共に高みに上げられ、そのことによってツァラトゥストラを殺害する石なのである。重さの霊が「石の上にしゃがむ」のはそのことを暗示するだろう。

同時に、重さの霊がこの「瞬間」の門の手前でツァラトゥストラから飛び降りそこにしゃがみ込んでしまうということは、重さの霊がそれ以上ツァラトゥストラとともに先に進めないことを意味している。重さの霊にとってはツァラトゥストラの没落が終着点である。ツァラトゥストラによって投げ上げられた石＝重さの霊がツァラトゥストラに戻り落ちるその円環は、この没落で閉じる。重さの霊にとって、ツァラトゥストラと対峙するその終着点の「先」などないのである。

以上の解釈は、重さの霊が語る「時間自体が一つの円環である」という思想について先に示した解釈に適合すると思われる。道徳の象徴としての重さの霊は、道徳の創始からの歴史が最高の高みに達したところで戻り落ちて自己を破壊するという、閉じた円環としての道徳の歴史以上のものを語ることはできない。永遠回帰の世界観は道徳が否定された世界を意味している。それは道徳が耐えられる世界でもなければ、道徳自身が知ることのできる思想でもないのだ。それゆえツァラトゥストラは重さの霊に対してこう語るのである。「〈お前は私の深淵的思想を知らないのだ。それに——お前は耐えることができないだろう。〉」(Za, 199)。この強い言葉からしても、重さの霊の思想が永遠回帰と無関係であると解すべきなのである。

さて、我々は最後に、この「幻影と謎」で語られる永遠回帰肯定の主体を確認しよう。ツァラトゥストラが重さの霊との対決を決意する印象的な場面に注目しよう。

「しかし、私のうちには、私が勇気と呼ぶ何かがある。それはこれまで私のあらゆる不満の念を殺害してくれた。この勇気がついに私に、立ち止まりこう語るように命じた。〈侏儒よ、お前か、あるいは私かだ。〉」(Za, 198)

ツァラトゥストラに重さの霊との対決を命じたのは「勇気 (Muth)」である。この勇気が道徳の化身たる重さの霊との対決を命じ、永遠回帰の世界像をツァラトゥストラに語らせることに導く。

この勇気について次のように言われる。「勇気はしかし最良の殺害者だ。攻撃する勇気は。それは死をも殺害する。というのもそれは語るのだ。〈これが生であったのか。よし、もう一度。〉」(Za, 199)。勇気はすべての苦痛を克服し、深淵に臨むめまいや同情をも殺害したのち (ibid.)、最終的に死を殺害する。死の殺害とは再生、復活を意味する。これはすなわち生を「もう一度」と欲すること、回帰を欲することである⁷。このように、「幻影と謎」で暗示される永遠回帰肯定の主体は「勇気」なのである。

「幻影と謎」では、ツァラトゥストラが重さの霊と対決し永遠回帰思想をほのめかした直後、黒いヘビがのどに這い込んだ牧人の幻影へと場面転換される。牧人はツァラトゥストラの「頭を噛み切れ、噛みつけ」という叫びに応じてヘビの頭を噛み切る。これを永遠回帰肯定の象徴と解せるということは、どの解釈者も認めるであろう。「幻影と謎」のテキストに即して理解するならば、この噛み切りを可能にしたのはハイデガー的な決断などではなく、「勇気」にほかならないだろう。

六 「快」＝「力への意志」＝「勇気」

以上、永遠回帰肯定の最重要テキストである「酔歌」、「救済について」、「幻影と謎」の解釈を通して、我々は永遠回帰肯定の主体としての「快」＝「力への意志」＝「勇気」を取り出すことができた。この三位一体の意味を完全につまびらかにすることは別の機会に譲り、この論文では『ツアラトウストラ』内部の叙述に基づき、これら三者の関係を簡単に予測することまでにとどめよう。

〈快は自分のために苦を必要とする〉の快の位置に勇気を当てはめるとこうなる。〈勇気は自分のために苦を必要とする〉。これは何を意味するだろうか。「幻影と謎」で述べられるように、勇気はすべての苦を克服するものである。勇気は苦に立ち向かう力を意味している。見方を変えるならば、勇気は苦に立ち向かうことにおいて自己の力を顕わにすることができるということである。その意味で〈勇気は自分のために苦を必要とする〉と言えるだろう。

興味深いことに、第四部「学問について」では勇気について次のように述べられる。「すなわち恐怖は——我々の例外である。だが勇気、冒険、そして不確かなもの、敢行されていないものへの快、——勇気こそが私には人間の前史全体に思われる」(Za, 377)。ここに勇気と快の連関を見ることができよう。勇気は「不確かなもの、敢行されていないもの」に立ち向かう。勇気はこれらへの恐怖を克服する (Vgl. Za, 377)。そこにあるのは悲壮さではなく「快 (Lust)」である。この快こそが恐怖を超えてそのような冒険に立ち向かわせると理解すべきである。冒険を挑めるのは、冒険の快を知るものでしかない。

この勇気と快の連関は、「幻影と謎」の勇気の描写におけるつぎのような謎めいた、しかし印象的な表現の理解に導くだろう。「勇気は最良の殺害者である、——攻撃する勇気は。というのも、あらゆる攻撃には軍楽隊の響き (klingendes Spiel) があるからである」(Za, 199)、「軍楽隊の響きと共に勇気はあらゆる苦痛を克服した」(ibid.)。また、勇気が死を殺害し「これが生であったのか。よし、もう一度。」と語ると述べられた後にもこう言われる。「しかしそのような言葉には多くの軍楽隊の響きがある。耳ある者は聞いてほしい」。このように、勇気は「軍楽隊の響き」とともに苦に立ち向かうと言われるのである。この「軍楽隊の響き」に、冒険の快、恐怖と苦を超えて恐るべきものに立ち向かうことの快を見るべきであろう。勇気は苦に悲壮に耐えるのではなく、「軍楽隊の響き」と共に喜び勇んで立ち向かうのである。

このような勇気の快と同様のものを力への意志にも見出すことができる。『ツアラトウストラ』において力への意志を主題化している唯一の章、「自己克服について」の次の叙述に注目しよう。

「私が生あるものを見出したところ、そこで私は力への意志を見出した。そして奉仕するものの意志の内にも、私は主であろうとする意志を見出した。／より強いものにより弱いものが役立ちたがるのは、より一層弱いものの主であろうとする後者の意志がそう説得する。この快のみは、後者もなしで済ますことはできないようだ。／そしてより小さいものがより大きいものに身を捧げ、最小のものへの快と力を得るように、最大のものもまた力のために身を捧げ、——生を捧げ

るのだ。／敢行であり、危険であり、死をめぐるサイコロ遊びであること、これが最大のものの献身である」(Za, 148)

ここに力への意志と快の連関が見て取れる。力への意志とは、主である「快 (Lust)」、支配する快への意志である。最大のものはこの快のためにわが身を犠牲にして危険に飛び込む。ここには明らかに勇気における冒険の快、立ち向かうことの快と同じものがある。ここから逆に、勇気の快というものの本質が力として露わになる。危険と立ち向かうことができ危険を支配できる力の喜びが、危険な冒険へと向かわしめるのである。危険と戦い危険を支配できる力の快への意志、これこそが勇気である。

今や「酔歌」の快を、このような力の快として理解すべきことは明らかに思われる。ニーチェ＝ツァラトゥストラは、生の本質に力への意志＝勇気を見出した。すなわち、世界の否定すべきものを敢えて求め、苦を引き起こす危険や恐怖に敢えて立ち向かう力の快こそが本来的な快であることを見出したのである。この力の快への意志は、それ自体としていかなる危険も恐怖も苦しい戦いも否定しない。なぜならそこにこそ力の快の源泉があるからである。それゆえ、一つの快に然りを言うことはそれ自体としてすべての苦しみに然りを言うことなのである。すべての耐え難いことに喜んで立ち向かえる最大の者、それだけの力の豊かさをもつ者は、まさにこの本来的な快、すなわち力の快そのものとして自己を自覚するだろう。永遠回帰の肯定はそのような境地なのである。

こうした回帰肯定の境地に達することが何を意味するのか、それは道徳の克服や価値転換という問題とどう関係しているのかについては、ここまでの解釈からはまだ定かでない。しかし少なくとも『ツァラトゥストラ』の最重要テキストの解釈から言えるのは、冒険と危険の敢行における力の快というものに、ニーチェは最高の世界肯定の鍵を見出していたということである。この力の快こそが、不完全で、謎に満ち、恐ろしい偶然に満ちたこの世界を、最高に喜ばしい冒険の場に変えるのである。

凡例

ニーチェの著作、遺稿断片の引用は、F. Nietzsche: Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe, de Gruyter, 1980. による。

引用は以下の略号を用い、著作は頁数、遺稿は巻数の後に頁数と遺稿番号を付した。

FW= Die froehliche Wissenschaft, Za= Also sprach Zarathustra,

EH= Ecce homo, KSA= Nachgelassene Fragmente.

『ツァラトゥストラ』の原稿の異文は、Nietzsche Werke, Kritische Gesamtausgabe, VI4, Walter de Gruyter, 1991による。

引用は KGW VI4の略号を用い、頁数を付した。

-
- 1 因果的解釈の代表として、細川亮一、2010、『道化師ツァラトゥストラの黙示録』、九州大学出版会、181-184頁、また、アレクサンダー・ネハマス、2005、湯浅弘・堀邦維訳『ニーチェ——文学表象としての生——』、理想社、特に230-233頁を参照。また筆者自身、以前はこの解釈をとっていた（新名隆志、1998、「超人の幸福における永遠回帰の肯定」、哲学論文集34輯、九州大学哲学会、47-62頁。特に60頁を参照）。
 - 2 分かりやすい例として Janaway の解釈が挙げられる（Christopher Janaway, 2007, *Beyond Selflessness, Reading Nietzsche's Genealogy*, Oxford University Press, pp.257-258）。
 - 3 Magnus はこの立場をとる。ただし彼は、このような一切の肯定は不可能だと考える（Bernd Magnus, 1988, 'Deification of Commonplace: *Twilight of the Idols*', in Solomon and Higgins (eds), 1988, *Reading Nietzsche*, Oxford University Press, pp.152-181, see pp.171-172.)
 - 4 ここに宇宙論的証明を見ることについては細川 2010に賛同しこれを参照した（細川 2010, 137-138頁）。
 - 5 ミルチャ・エリアーデによる古代の反復的、円環的世界観の研究は有名であるが、エリアーデもこの円環的世界観を「時間の再生」として表現している。（エリアーデ、1963、堀一郎訳『永遠回帰の神話』、未来社、参照）。
 - 6 このモチーフは『この人を見よ』で次のように示されている。「ツァラトゥストラはこの最も致命的な誤謬、道徳を想像した。したがって、彼はまたこの誤謬を認識する最初の者でもなければならぬ。〔中略〕誠実さからの道徳の自己克服、道徳家からその対立物への——私への——自己克服、これこそ私の口においてツァラトゥストラという名前が意味するものである」（EH, 364）
 - 7 「幻影と謎」の原稿の異文では、興味深いことに、死に対する態度について重さの霊とツァラトゥストラの対比が鮮明にされている。そこでは重さの霊が次のように述べるのである。「お前神の殺害者、お前克服された者よ、だがお前はお前の死を克服しなかった。お前が投げた石は戻ってくる——どんな石も落ちざるをえないのだ」（KGW VI4, 339）。このように重さの霊は、ツァラトゥストラと対比的にツァラトゥストラが死を克服できないと語るのである。これもまた、ツァラトゥストラの語る永遠回帰の世界が死を克服する繰り返しの世界であるのに対し、重さの霊がツァラトゥストラの没落（死）を終着点としていることを表すものであろう。

本稿は既発表論文が査読を経て新たに掲載されるものである。